

去る4月1日。国外にいた筆者は、スマートフォンの文字情報で新元号を確認した瞬間に「ドキッ」とした。「れ」で始まる冷たい音韻に、違和感を覚えたのである。だが、異国の街頭を歩きながら、「今の日本では、この外来語っぽい響きが受けるのだろうか」とも考えた。帰国してみると案の定、立場や主義主張を問わず、新元号の語感の評判は良いようだ。

とはいえ「れいわ」という発音はいかにも日本的ではない。そもそも大和言葉には「れ」で始まる単語は存在しないのだ。日本の市町村名でも「れ」で始まるのは、アイヌ語由来の北海道礼文町と、漢語由来の熊本県苓北町しかない。礼儀、冷静、歴史、列举、連立などの「れ」で始まる単語は皆、中国語由来の漢字熟語で、読みは音読みである。礼子、玲子、麗子などの女性名も、漢語の礼、玲、麗の後に子をつけた、いわば漢日ハイブリッド語だ。

ちなみに「れ」で始まる元号は、これまでは奈良時代初頭の「霊亀(レイキ)」しかなかった。霊亀とは中国の霊獣の一つで、漢語そのままだが、今の感覚でいえば「ドラゴン元年」と名乗ったような新しさがあっただろう。だがこれが実際には「りょうき」と読まれていたとしても、筆者は怪しまない。日本では単語冒頭の「れ」は避けられやすく、「礼記」は「らいき」、「令旨」(親王の出す指令)は「りょうじ」、「霊異記」は「りょういき」だ。南北朝時代の北朝年号の「暦応」も「りゃくおう」だろう。21世紀に生きる筆者だが、「令和」もつい、「りょうわ」読みたくなってしまう。

令和は「初めての国書(万葉集)典拠の元号」だと聞くのに、なぜ読みが殊更に漢語的なのか。漢文の詞書(コバガキ)の部分から字を取ったからである。そしてその「梅の花の下に集った」という趣旨の詞書は中国古典の「文選」からの本歌取りと目される。だから音韻も内容も中国語っぽいのは当然で(春の花も中国では梅だが、平安以降の日本なら桜だろう)、これを「中国と距離を置いた画期的な新元号」と評価するのは無理がある。ディズニーの「ライオンキング」が手塚治虫の「ジャングル大帝」の本歌取りで、米国オリジナルとはいえないのと同種の話だ。

お断りしておくが筆者は、新元号が中国古典の本歌取りであっても、問題だとはまったく思わない。英米で発明され実用化された自動車が、今や高品質な日本製品の代表になっているように、本歌取りも本家になれるのだ。元号にしてからが、中国発祥だが日本だけに残る、「本歌取り日本」の象徴のような存在である。そう胸を張ればいい話を、無理に「国書典拠」と言い張るのはかえって恥ずかしい。今の日本で漢語的な音韻が好まれることも、違和感はあるが事実として認めるしかない。

ところで、そんな「令和」はどんな時代になるだろうか。ますます社会の各種同調圧力が高まり、「令の下に和する」ような時代になっていくのだろうか。あたかも中国共産党の号令の下に和している隣国のように。いや筆者には、そうは思えないのである。

「応仁」という徳の高そうな元号にしたら大乱が始まり、黒船来航を受けて「安政」と改元したら桜田門外の変が起きてしまったように、元号と逆の方向に事態が進むことはままある。統一地方選前半において島根や福岡などで見られたよう、しばらく押さえ込まれたいた中選挙区的な原理＝与党内での権力争いを抑えきれず、保守分裂選挙となるケースが、これから増えるのではないだろうか。小選挙区制度を採用したのに、野党を育てて2大政党制に向かう意欲がなく、与党万能になった日本。だが、その先行きは、与党内の亀裂の拡大と1・5大政党制の復活となるように思えるのである。

そうはならないシナリオがあるとすれば、維新が反自民票を吸収しつつ体制内野党としてI強支配に翼賛するということだろう。だがその前提たる今の株高は続くだろうか。中国の資産バブルや、異次元の金融緩和に伴う日銀の国債大量保有のリスクはいつか顕在化する。首都圏にもいつか次の天災が来る。その先のビジョンなく大政に翼賛する者は、まさに運を天に任せているようなものだ。令和は、票と金と運でつながる冷めた和が、壊れていく時代となる予感がする。